ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「パーティ……？」

　覗きをしていた失礼を詫び、一応居間に入れてもらえた雅也と拓馬は首を傾げていた。

　二人の目線は青年……さんに向けられている。

　師匠である田島辰巳から話を聞く限り、どうやら彼は、田島辰巳が大学で教鞭をとっていた時の教え子らしい。自分達の師匠が大学の先生をやっていたなどとは、良助や奈央も含めて初耳だったのだが、どうやらここの道場が出来るまでの数ヶ月の間、食べていくために教師をやったのだとか。

　契約は半年だったのだが、そんな僅かな時間でも、こうして会いに来てくれる教え子がいることに、四人は少し驚いていたのだが……同時に、ちょっと疑問もあった。

　田島辰巳が教師をしていたという話しを今知ったことからも明らかなように、三人がここで修行を始めてから、大学時代の教え子がやってきた、などということは今まで無い。

　しかも、手土産はパーティの招待状ときたものだ。話を聞くに、そのパーティは同窓会とかそんな類のものでは無く、大人の社交場……とでも言えばいいのだろうか。そんな感じのものなのだ。参加する人も、普段テレビをあまり見ない三人でさえ知っているような芸能人や俳優、女優、有名な会社の社長や取締役幹部といったメンツである。

「いいんですか？　そんなパーティに僕等が参加しても……」

　そして何より、このパーティに招待されているのは、田島辰巳では無いのだ。渡された招待状に書かれている名前は、

　田島　良助

　相川　拓馬

　青柳　雅也

　さらに聞くと、太一と神楽にも、招待状を送ったのだとか。

　加えて、九条一は今はフリーターらしく、そんな人物が何故このような招待状を、といった疑問もある。九条曰く、パーティの主催者が自分の知り合いで、別にややこしい取引とか面倒なものが絡んでいるわけでは無いから……だそうなのだが。

　第六感……とでも言うべきか。これで怪しむな、という方が無理な話である。

　九条は、拓馬の問いにコクンと頷いた。

「どうだろうか？　確かにメンツを聞いて気後れするかもしれないが……先程も言ったように、夏の暑い時期を、避暑地で優雅に過ごそう、というのが目的のパーティなんだよ。それに」

　九条は一瞬だけ、チラリと田島辰巳の方を見た。

「どうやら君達の合宿も、延期になったそうじゃないか。空いてしまった時間、厳しい修行を忘れて、のんびりするのも悪くないんじゃないかな？」

　優しそうな目と声でそう語りかけてくるものの、雅也と良助は正直あまり乗り気では無い。合宿が延期になって空いた時間は、別にいつも通りの修行をすればいいだけで、それを二人共苦痛に感じたことなど無いのだ。だが――

　雅也と良助もまた一瞬だけ、チラリと別の方向を見る。

　こういう時に上手く断ってくれそうな田島辰巳と拓馬なのだが、驚いたことに、あまり言葉を発さない。いや、それは雅也と良助の二人も同じなのだが、見知らぬ客が来たときは基本いつもこうで、会話をするのは師匠と拓馬の役目だ。

　田島辰巳は、まあいいだろう。言葉は発さないものの、パーティの招待状を送った人のリストを、さっきから表情が読めない顔で上から下へと眺めているからだ。

　問題は、拓馬である。

　最初は二人と同じように、参加することを渋っていたような顔をしていたのだが、主催者がとある人物だということを聞いた途端、少しだけ目の色が変わったことを、二人は見逃さなかった。

　。

　雅也と良助は見たことも聞いたことも無いのだが、彼は有名な映画俳優らしい。実は拓馬、少し前に、一之上学校の理事長に誘われて映画を見てきたのだ。一葉冥利は、その映画の主演俳優である。ちなみにジャンルはアクションだ。

　理事長的には、毎日修行漬けの拓馬のことを慮って、気晴らしをさせるつもりで連れ出したのだろう。拓馬は、あまり乗り気ではなかったのだが、田島辰巳から許可もでたし、こういうのも付き合いなので、お言葉に甘えて行ってきた……のだが。

　普段映画とかそんなものを見ないせいか、初めて見る大スクリーンの中を縦横無尽に動き回るアクターの姿に、拓馬は感動で心とか魂とかそんな物が震えたそうだ。帰ってきた時の拓馬といったら凄かったのを、雅也も良助もよく覚えている。別に無口なわけではないが、良く喋る奴でも無い拓馬が、あんなに途切れることなく言葉を発していたのは、後にも先にもあれ一回だけだ。

　買ってもらったというパンフレットも、実は二人は拓馬から借りている……というか拓馬に無理矢理読むよう押し付けられたのだが、正直面倒くさくてまだ一ページも読んでいないのは内緒。

　それはともかく、それ以来、すっかり拓馬は『映画』というものにハマってしまった。映画自体はあれしか見ていないものの、連日映画関連の本を大量に図書室から借りては読む毎日である。本人の名誉のために言っておくと、拓馬はやることはちゃんとやっているので、成績も落ちてなければ、ポケモンバトルの腕も鈍ってはいない。

　そんな中、憧れの大スターが主催するパーティだ。加えて、拓馬も色々あった予定をキャンセルせざるを得ない状況。

　色々と怪しいが、仲間が四人に、頼れるポケモンもいる。万が一何かあっても、取り敢えず何とかなるだろう。拓馬はこの時、こう考えていた。

腰に付いたボールを、一つずつなぞる。ベイリーフ、リーフィア、コドラ、タテトプス、エアームド、そして……今年の春に加わった、新しい仲間。

「こんなにいるしね……」

　誰にも聞こえないような大きさで、拓馬はそう呟いた。

「……」

　一方その頃、田島辰巳は拓馬とは対照的に、このパーティには少々消極的な考えでリストと招待状を見ていた。

　話自体が、そもそも怪しいのは、田島辰巳も理解しているところなのだが……実は彼の懸念は、別のところにある。

　とある一人の人物。そこで、田島辰巳の目は固定されていた。

　正直な所、この人物さえいなければ、田島辰巳はパーティの参加を許可していた。確かに怪しい誘いだが、今の弟子達の実力に加え、太一と神楽も参加するのであれば、多少の危険は何とでもなるし、寧ろいい経験だ。今後の彼等の安全も考えると、いっそここで送り出してあげたほうが、いざという時のためにもなる。何もなければ、それはそれで夏休みのいい思い出になるだろう。彼等はまだ小学生。少しくらい遊ばせてあげたいと思っていることは、田島辰巳も否定はしない。

　だが、この人物が参加するとなると、躊躇ってしまう。自分程では無いにせよ、実力だけなら五人を遥かに上回るのだ。仮に『弟子三人と太一と神楽』対『この人物一人』で戦っても、間違いなく弟子達が負ける。

　いや、場合によっては死ぬ。少なくともこの人物のポケモン一匹で、弟子達のポケモン全員分の戦力を上回るのだ。もし本気で殺りあったら……結果は前述の通りだろう。

　だがしかし……

　まさか、そんなことにはなるまい。

　田島辰巳は、考え直す。確かにこの人物が本気を出したら非常にマズイのだが、そうなるのはあくまでも、この人物が『危険人物』であれば、の話なのだ。正直、田島辰巳の中で、この人物はまだ『危険人物になりうる片鱗が見え隠れしていた』というレベルで、しかもそう感じたのは、もう何年も前のこと。

何かあれば、自分のところに連絡がくるし、いまの所はそのような連絡も噂も無い。

きっと、問題は無いだろう。

田島辰巳はそう思って、このパーティへの参加の許可を出した。